

論文

本論は 2018 年 11 月 17 日～18 日に皇學館大学において開催された「伊勢国際宗教フォーラム第 12 回年次大会、宗教と言葉——聞く・聞こえる・共感する——」において講演した講演録をもとに、論文化したものであり、令和 3 年 10 月 1 日に発行された『伊勢国際宗教フォーラム第 12 回・第 13 回年次大会記録集』に掲載されたものです。一部を訂正しています。

『クルアーン』・・・神に逢う言葉

塩尻和子（筑波大学名誉教授、アラブ調査室長）

1、ロゴスとカラム

周知のように、キリスト教におけるイエス・キリストの位置づけは、しばしばイスラームにおけるクルアーン（コーラン）に相当するといわれる。神のロゴスとしてのイエス・キリストの立場と、神がムハンマドをとおして人間に語りかけた神の言葉カラムであるクルアーンとは「神の言葉」という共通性がみられるからである。ロゴスとカラムはともに聖なるものの顕現としての「言葉」であり、宗教真理を開示する象徴としての役割を担うものである。そこでは日常的な言語が非日常的な地平へと止揚され、言葉としてはそのままのかたちによりながら、究極的なものを表現する象徴言語となるのである。

イエス・キリストの本質が「神の言葉」とされる根拠は新約聖書の「ヨハネによる福音書」の第一章によることはよく知られている。聖書によればロゴスには神的存在という性質、創造活動の力、生命の光という構造などが見られる。聖書が伝える神の言葉は、ユダヤ教徒として生まれ、ユダヤ社会で生きたイエスの苦悩の人生のなかに現れたということが出来る⁽¹⁾。

イスラームにおけるカラム、神の言葉（Kalām Allāh）であるクルアーンは、永遠なる神の言葉として、神によって選ばれたアラビア語で人間界に啓示された。クルアーンは神が天使を通じて預言者ムハンマドに語りかけた神の言葉をそのままに書き留めたものであると信じられている。

これに対して聖書は、特に新約聖書の前半はイエス・キリストの一生について記したもので、それぞれの福音書には明確な著者が存在する⁽²⁾。しかしクルアーンにはそういう意味の著者はいない。ある意味では「クルアーンの著者は神である」ということができるかもしれないが、むしろ、そのような次元を越えたところにクルアーンはあると考えられる。そこで用いられる言葉は人間が日常的に用いる言語であるが、日常的な言語が言葉としては何らの変化もないままに、究極的なものを表現する聖なる言語へと変貌を遂げている。

したがってクルアーンと聖書とは「聖典（Scripture）」という性格がまったく異なるということができよう。永遠なる神の言葉としては、クルアーンは神ではなく、神の一部で

もないが、しかし神の言葉以外のなにものでもないと考えられるのである⁽³⁾。

クルアーンにおいても「言葉」は創造活動の力であり、被造物である人間へ与える指針であり「道」である。カラームは、神が被造物にたいして語りかける言葉であると同時に「あれ」という一言で事物が造られる、存在付与の言葉である。神は宇宙天地の創造主であるとされるが、その創造は「あれ (kun)」という言葉をもってなされるからである⁽⁴⁾。神が「在れ」と命じると、天が開け、山ができ、川ができ、そして人間が生まれるという。そういう神の創造は「在れ」という言葉をもってなされる、そのために神は宇宙天地の創造神であると考えられるのである。

一方、イエス・キリストの十字架上の刑死が贖罪の死であったというのは、その不条理な死を非日常的な聖なる次元へと止揚した結論でもあるということができよう。当時でも十字架刑というのは死刑の中で最も残酷な死で、体の一部を傷つただけで数日間、野晒しにするという、少しずつ苦しみながら死んでいくという死刑の方法は、刑法としては最も残酷なものだと言われるが、そのような残酷な死を遂げるということが単なる罪人としての刑死ではなく、人類すべての罪を背負っているのだと解釈することで「贖罪の死」というキリスト教の最も重要なモチーフが成立していくことになる。

こうして、非日常的な聖なる次元においてはイエスを死に至らしめる結果となった「神の言葉」は、隠された世界を開示する象徴としての機能をもつことになる。それゆえにこそ、神の言葉をその一身に実現したイエスは、神の創造の力を実現したのであり、その創造の力の象徴として、「イエスは神の言葉ロゴスである」と言われうる。このことは人間にとっては絶対他者である超越的な神との交わりが、神の言葉ロゴスであるイエスにおいて可能となるということを示している。そのためにキリスト教の信徒は、「主イエス・キリストの御名において」と、イエスを通して神に祈るのである。ここでは人間の祈りはイエスを通して初めて神に届く、そのように考えられている。

しかしイスラームの場合は、ムハンマドは普通の人間であり、彼を通して神に近づくということはまったく考えられていない。イスラームにおけるカラーム「神の言葉」は全知全能の神の神秘を、神自らが説き明かすものであり、カラームはそれ自体が聖なるものの顕現なのである⁽⁵⁾。神に選ばれたアラビア語でアラブ族のムハンマドに下された言葉の一語一句によって、人間は神の意志を知り、神の真理へ近づくことができる。そのためには人間はクルアーンの章句を日々礼拝のたびに朗読しなければならない。聖なる言葉を、目で追って読むのではなく、暗証して唱えることによって、隔絶された絶対的な神に出会うことができる。クルアーンにはムハンマドは普通の人間として描かれるが、預言者として神の命令に従うだけでなく、神の言葉を人間界に運ぶという特別な役割を与えられたために、一段上位の「神の使徒」となった⁽⁶⁾。

「聖なるものの顕現」としてのロゴスとカラームは、どちらもそれによってのみ絶対者と被造物との交わりが可能になるという機能を実現する「言葉」であり、宗教的な地平における究極的な象徴言語なのである。そこに聖なるものの顕現、聖なるものが顕れるとい

う機能は、キリスト教のロゴスと、イスラームのカラームには変わりはない。それによってのみ絶対者と被造物との交わりが可能となっていくとすれば、「キリスト教の聖書とは、人間が語る神の言葉」であり、書記が神の靈感に打たれてイエスの生き方を描くというところに、「人間が語る神の言葉」が明らかになるということができる。一方のイスラームの場合は、神は人間の言葉であるアラビア語を選んで預言者ムハンマドに語りかけ覚えさせ、それをムハンマドの周辺の人々が暗唱したり書き留めたりしていくという作業をとおして、人間に「神が語る人間の言葉」が与えられた。

要約すれば、キリスト教の聖書は「人間が語る神の言葉」であり、イスラームのクルアーンは「神が語る人間の言葉」なのである。

2、クルアーンとはなにか

【神の言葉】

クルアーンは神がアラビア語で人類に下した啓示をそのまま書き留めたものであり、一言一句、紛れもない永遠なる神の言葉であると信じられている。神は大天使ジブリール（ガブリエル）を預言者ムハンマドに遣わして、それぞれの時にふさわしい言葉を与えたが、その言葉をそのままに、人間の手をまったく加えることなく結集したものが聖典クルアーンであるとされる。ヘブライ語聖書や新約聖書、仏典などには、確実に著者や作者が存在しているが、彼らが神や仏の靈感に導かれて記述したとしても、聖典が人間の手によって作成されたことは否めない。ここに、他の聖典や聖書とは異なる、聖典としてのクルアーンの第一の独自性がある⁽⁷⁾。

ムハンマドは文字が読めなかったとされており、天使を介してもたらされた神の言葉を彼は読むのではなく暗記して人々に伝えた。そのために、クルアーンは「目で読むものではなく、声に出して唱えるものである」という性格をもつことになった。

こうして、神の言葉がムハンマドに託されたために、彼は預言者であり使徒となったのである。ムハンマドは最後の預言者とされており、彼の死後はもはや神からの啓示は降りてくることはなくなったが、信者はすでに与えられた神の言葉を日々朗誦することによって、神と向き合い神の語りかけに接することができると信じられている。神がムハンマドに天使を通じて与えた言葉は、そのまま神が信者に語りかける「神の言葉」となるからである。

繰り返しになるが、キリスト教の場合は、イエスを通して人々は神に近づくことができ、また、そのイエスの一生を書記が、人間の側がまとめたもの、つまり聖書を読むことで神の意志を知ることができる。教会の礼拝で信徒が声をそろえて聖書を詠むこともあるが、基本的には聖書は「読むもの」である。聖書を読み、そして神と人との垣根を取り払い、イエスを通して神に近づき、神を崇拜する、というのは聖書の作法である。

しかしイスラームの場合は、ムハンマドを通して神に近づくということはまったく考えられていない。ムハンマド自身は無学で字が読めなかったために、クルアーンが彼にもた

らされた時、天使が彼の耳に神の言葉を吹き込んでしっかり覚えさせ、そして家族のもとへ帰すという作業が必要であった。ムハンマドは、夢遊病者のようになりながら、教えられた言葉を周囲の人々にそのままつぶやく。当時、専門的に書記職に就いている人々が、ムハンマドのつぶやく言葉をそのままに書き留めていった、その断片が集められて、ムハンマドの死後、二十年くらいで結集されたものが、今日私たちが手に取ることのできるクルアーンとなっている。

そもそも、アラビア語の「クルアーン」(al-Qur'ān)という語は本来「声に出して詠まれるもの」を意味している。クルアーンは114章から成り、前半にはおもに後期のマディーナ時代の啓示が、後半には前期のマッカ時代の啓示がまとめられている。内容は唯一の神への服従の命令、終末の警告、宗教儀礼から、社会生活や家庭生活上の法規範、慣習、政治的理想などにまで及ぶ。しかし、クルアーンの記述は日常的な会話表現と商売用語で綴られており、月並みな道徳訓や断片的な警句などの繰り返しが多く、物語性に欠けている。神の言葉としての崇高な理想や深淵な宗教倫理などが記されていることもない、実に断片的な啓示である。

【物語性の欠如】

イスラームの神の啓示は西暦六一〇年ころからムハンマドが死ぬ六三二年まで人類に下されたとされる。しかし、その思想はその期間に初めて啓示されたものではないと考えられている。神はクルアーンに先立って、ユダヤ教徒にトーラーを、キリスト教徒に福音書を与え、その締めくくりとしてクルアーンを下した。クルアーンの中にはヘブライ語聖書の創世記から新約聖書のイエスの生涯までの、いわばセム系の宗教的伝統が周知の事実として語られている。しかし、新旧の聖書のように世界の成り立ちや民族の歴史、信者の救済史、教祖の一生などを、史的観点を踏まえて記したものではない。また他の民族に伝わる神話のように、宗教的伝統の成り立ちを物語的に順を追って述べたものでもない。それらには特定の意図をもった著者があり、また筆記者の主観が入り込む余地があった。

しかし、前述のようにクルアーンはムハンマドに齎されたままを書き留めたものであるとされ、一言一句がそのまま、紛れもない神の言葉であるとされる点がその他の聖典と際立って異なる点である。クルアーンの物語性の欠如はまさにこの点によると考えられよう。クルアーンはムハンマドにもたらされたままに書き留められたものであり、一言一句が紛れもない神の言葉であるとされるが、この「物語性の欠如」がクルアーンの独自性でもあり、第二の特徴にもなっている。

クルアーンがどのような折にムハンマドに届けられたのかについて検討すれば、その特徴は明らかになる。これについてはいくつかの伝承があるが、イスラームの宣教活動のなかでムハンマドを取り巻く状況は決して容易なものではなく、極度の困難や多くの犠牲を伴うものであったということが大きな要因である。そのために神は、それぞれの状況変化に対処するため、あるいは警告や訓辞を与えるため、困難な事態にあつては預言者や信徒

を激励するため、随時的なさまざまな事態に即した内容の啓示をムハンマドに与えたと考えられている。

したがって、状況が異なれば、神の言葉や命令も異なってくることもあり、啓示の時期によっては、相互に矛盾する内容がみられることにもなる。クルアーンの章句の矛盾や曖昧な点は、後に神学上の大きな争点になっていくが、中世の法学者によって、このような場合には、時期的に新しく啓示された言葉によって過去の啓示が「廃棄」されたとみなされることが多い⁽⁸⁾。

要約すれば、イスラームのクルアーンでは、神はアラビア語を使って預言者ムハンマドに語りかけて覚えさせ、それをまた周辺の人々が暗唱し書き留めていくという作業を通して作成されたものであり、前述のように「神が語る人間の言葉」と考えることができる。そのために、神が選んだ言語で語るクルアーンという言葉は永遠で不変であり、便宜上、各国語に翻訳されたものは、もはや神の言葉ではなくなり、決して礼拝には用いられない。一方のキリスト教の聖書は、聖書記者たちが神の靈感に打たれながらイエスの一生を自らの言葉で記載したものであり、「人間が語る神の言葉」として各国語に翻訳され、一部の聖職者階層を除いて、礼拝時にも翻訳された聖書が用いられる。

3、クルアーンの音楽性

私たちがクルアーンの日本語訳か英語訳を、一般的な聖典の形式や内容を期待して読むなら、最初の数ページで興味を失ってしまうかも知れない。クルアーンには唯一の神への信仰の命令や多神崇拜の禁止とともに、月並みな道徳訓や教訓が無味乾燥な用語で繰り返されており、これらが日常的な会話表現と直截的な商売用語で綴られていて、物語的な面白さも心に響くような美しい文章も、ほとんどないからである。それなのに、クルアーンがなぜ1400年以上もの長い間、世界中の多くの信者によって詠まれ信じられてきたのだろうか。

その理由のひとつは、クルアーンの日常的で月並みな教訓が人々に神への服従の方法をわかりやすく教え諭して、具体的な生き方を指導しているという点があげられる。美しい言葉で綴られた抽象的な議論や高邁な精神論ではなく、わかりやすく現実の生活方法の原則を指示することは、新しい宗教が定着するための大きな要因ともなるからである。

もうひとつの秘密はクルアーンが記されている言語、アラビア語にある。クルアーンは、アラビア語韻文の妙技を縦横にちりばめた散文詩の形式をとっており、声に出して朗誦することによって、韻文の音の美しさが際立つといわれる。また同じ文章の繰り返しは、聞く者を陶醉の境地へといざなう力をもっている⁽⁹⁾。礼拝で外国語に翻訳したクルアーンを用いることが禁止されているのは、神がアラビア語を聖なる言語として選んだという理由によるが、外国語に翻訳すれば音楽的な韻文学の美が失われるからでもある。前にも述べたが、実際には内容を知るために各国語に翻訳されているが、宗教儀礼には使うことができない

厳格な一神教であるイスラームでは、モスクの内外を飾る彫刻や装飾品には偶像崇拝につながるものは一切排除されている。預言者ムハンマドの像も絵も全く見られないばかりか、宗派によっては動物や植物の模様もそれと特定される形では用いられない。音楽も偶像崇拝の延長上にあると考えられるために、礼拝には賛美歌もオルガン演奏なども用いられない。まるで殺風景にみえるイスラームの礼拝において、唯一の「音楽性」といえるものは、人の声によるクルアーンの朗唱である。それぞれのモスクや地域には訓練されたクルアーン詠みや、モスクの尖塔から礼拝を呼びかけるムアッジンと呼ばれる者がいて、朗唱技術を競いあう。優れた詠み手によるクルアーンの朗唱は極めて音楽性・芸術性が高く、聴くものの心を惹き付け、厳粛な宗教的境地へとといざなうのである。

偶像崇拝が厳しく禁止されているイスラームではモスクや宗教施設における礼拝に音楽や声楽さえも用いられることはないが、人間の声によるクルアーン朗誦は唯一の音楽性を醸し出すものである。モスクの尖塔から一日五回の礼拝への参加を呼びかけるアザーンはクルアーンの言葉そのものではないが、美しい旋律を伴って朗唱される。

近年、伝統回帰が叫ばれるようになり、あまりにも技巧を凝らしたクルアーン朗誦やアザーンの呼びかけは、一種の音楽にあたるとして否定的に捉えられる傾向があるが、クルアーンがアラビア語のすぐれた韻文学の傑作であることには変りはない。

4、神の言葉の関連性

シカゴ大学の高名な宗教学者であったW・C・スミス博士がキリスト教とイスラームを対比して次のようなチャートを作成したことはよく知られている。

クルアーン……イエス・キリスト
ハディース……聖書
ムハンマド……パウロ

イスラームの聖典クルアーンにイエス・キリストが対応するのは、どちらにも「神の言葉」という深遠な意味があるからである。クルアーンは一語一句紛れもない神の言葉を、啓示されたままに書きとめたものであるとされる。いっぽうのイエスはキリスト教の創始者であると同時に「神のロゴス」として神の言葉が地上に顕現したものと考えられている。

ハディースは預言者ムハンマドの言行録であり、いふなれば彼の生涯の記録である。創唱者の一生の記録としては、聖書、とくに新約聖書の最初の四福音書に対応する。

一方、最後の最大の預言者であるムハンマドはスミスのチャートでは、パウロと対応される。イスラームの創始者であるムハンマドが、パウロと対比されるのは、それぞれの宗教を民族の枠を超えて普遍的な世界宗教へと拓く契機を作ったからである。それぞれの宗教の創唱者としての立場を示すとすれば、ムハンマドにはやはりイエス・キリストが対応するであろう。しかし、両方の宗教とも、真の意味の創始者は「神」と考えるなら、

スミスの対比は意義深い指摘である。

5、第1章と「主の祈り」の比較

クルアーンは 114 の章で成立しているが、その第1章は開扉章とも呼ばれ、わずか7節の短い章である。しかし、この章には、イスラームの教えが凝縮されているといわれる。同時にキリスト教の「主の祈り」と酷似していることも興味深い点である。

和訳であるが、ここで双方を対比してみよう。

クルアーン第1章

- ① 慈悲あまねく慈愛深き神の御名において。
- ② 万有の主、神にこそ、すべての称讃あれ。
- ③ 慈悲あまねく慈愛深き御方、
- ④ 最後の審きの日の主宰者に。
- ⑤ わたしたちはあなたにのみ崇め仕え、あなたにのみ御助けを請い願う。
- ⑥ わたしたちを正しい道に導きたまえ。
- ⑦ あなたが御恵みを下された人々の道に。

あなたの怒りを受けし者、また踏み迷える人々の道ではなく。

キリスト教の「主の祈り」

天にまします我らの父よ。

ねがわくは御名をあがめさせたまえ。御国を来たらせたまえ。

みこころの天になるごとく、地にもなさせたまえ。

我らの日用の糧を今日も与えたまえ。

我らに罪を犯すものを我らが赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ。

我らを試みに会わせず、悪より救いいたしたまえ。

国と力と栄えとは、限りなく汝のものなればなり。

アーメン。

(新約聖書マタイによる福音書第6章9節～13節・同ルカによる福音書第11章2節～4節から)

【クルアーン第1章の解説】

第一節「慈愛あまねく、慈悲深い神において」

神は慈愛（恵み）の神としてイスラームへの入信を呼びかける。クルアーンは、まずなによりも神の人間に対する恩恵を示している。神を信じる者に対しては、悔悟を受け入れる深い慈悲をもって導くことを伝える。

第2節「万有の主」とは、神が全ての世界の主であると示す。

神とは、あらゆる事物、全ての世界、宇宙存在の全ての創造神であり、被造物からの感謝の対象である。

第3節「慈愛あまねく、慈悲深いお方。」

創造神である神の「慈愛あまねく」は、全ての被造物への慈愛のことで、「慈悲深いお方」とは信徒に対するものとされる。慈愛あまねき神として、神への信仰（イスラーム）へ招待され、それを受け入れた者には、現世での行いが神の導きに叶うものにならない。罪を犯しても、悔悟する人間、悔悟して神の信仰と導きに進む人間に対しては、神は慈悲深い神として信徒に慈悲を与える。

第4節「最後の審判の日を主宰する御方。」

クルアーンの教えでは、現世での信仰実践と、現世での世俗的生活が神の導きに従っているかどうか判断される。ここでは信仰に入るだけでは不十分で、信仰実践が問われる。最後の審判の日には、生前の行為実践が裁かれるということを説いている。

第5節「あなた（神）だけを私たちは拝みます、あなた（神）だけに助けを求めます。」

神以外のものに頼らないという信仰の立場を示している。信仰の成就是神の助力なしにはあり得ないからである。イスラームでは、何事も神に従い、神に全てを委ね、頼むという他力本源の教義は、ここで明確になっている。

第6節「（神よ。）私たちに正しき道へ導き給え、その道とはあなた（神）が恵み（豊かさ）と救い）を与えた者たちの道です。」

第7節「その道とは、あなたの怒りを蒙った者たちや、神の導きを失って迷った者たちの道ではありません。」

第5節に見られる「イスラームの他力本願」は、何もしないということではなく、善悪双方への行為能力を併せ持つ人間が、善行へ導かれるように助けを願って信仰することを指している。そのために、過去の信仰者たち、とくに預言者たちの善行の事例が示され、正しき人たちと同じ道を歩むことを祈願する。

第7節の「怒りを蒙った」とは、神の啓示を書き換えたと言われるユダヤ教徒を指す。また迷った者たちとは、不可視の神について、地上で生きたイエスを神の子として、三位一体に位置付けたキリスト教徒を指す。しかし、ユダヤ教徒やキリスト教徒に対する反感を指摘するものではなく、一般的に神の教えから背いた者たちを指摘するものである。

6、「神に逢う」という神秘体験

クルアーンの描く神は、絶対的な超越神であり、人間の能力では決して把握することのできない不可知神である。有限で不完全な人間がそのような神とかわることができるのは、ほかならぬこの世界の存在によってであり、この世界内に人間が存在することである。人間にとっては、神はこの世界の創造によってのみ自己を現わすのである。このような世

界があるということは、これを創造した神の存在そのものを証している。世界のあらゆるものの存在は神の意志であり徴であり、同時に人間に対する恩寵である。

イスラーム神学では、神がこの世を創造したのは、人間に利益を与えるためであり、人間がその創造世界を利用するためであり、また創造そのものが神の恩恵であると考えられている。天地自然の創造やその秩序がすべて全能の神の徴であり、神の存在証明であり、同時に被造物に対する神の恩恵でもあると教えられるのである。

クルアーン朗誦は、神の被造物である人間の能力によっては、決して見ることも触ることもできない絶対的で超越的な至高の神に逢うことができる唯一の方法である。神の言葉であるクルアーンを朗誦することによって、この世界内で神に逢うという宗教体験は、信徒にとっては、まさに神の恩恵にほかならない。

そのために、特に神秘主義者はクルアーンの言葉を繰り返し唱えるという修行階梯によって、自分が意図しなくても、自分の舌が自然に繰り返し神を賛美するようになるという神秘的体験を得ることができ、神との神秘的合一の境地を実感できるとされている。

神秘主義者ではない一般信徒にとっても、真正の神の言葉とされるクルアーンの朗誦は、神の被造物である人間が、超越的絶対的で、人間の能力では決して知ることができない不可知の神に逢う唯一の手段である。

114、人々章(アン・ナース) マッカ啓示 6 節

- ① 言え、「ご加護を乞い願う、人間の主、
- ② 人間の王、
- ③ 人間の神に。
- ④ こっそりと忍び込み、囁く者の悪から。
- ⑤ それが人間の胸に囁きかける、
- ⑥ ジン（幽精）であろうと、人間であろうと。」

この最後の章で「私たちの心から秘かに囁きかけるものを排除してください」や「悪魔の囁きを排除してください」という、神へ救済を求める祈祷の言葉で終わっている。最後に簡潔完結ではあるが、宗教としてのまとめの祈祷文となっている点が興味深い。第1章と、この最後の114章の二つで、イスラーム教徒にとっては、最も重要な願いが要約されている。

仏教でもばらばらと最初と最後だけお経を読んでそれで全部読んだことにするという儀式があると聞いたが、イスラームの場合も、一日5回の日々の礼拝に第一章と最後の114章を朗唱すると、クルアーンを全部朗唱したことになるといわれている。

クルアーンの描く超越的な、絶対的な超越の神、人間界とはまったく関わりのない神、しかしその神の言葉が、私たちに与えられたために、ちょうどイエスが神の子とされたの

と同様に、信者は人間の立場でありながら、神に出逢う、神の力に逢う、神の精神に触れることができる、そういう神に逢う手段としてのクルアーン朗誦というものが用意されている。繰り返しになるが、人間の側の言葉を以て、キリスト教のように神に向かい合うのではなくて、神の言葉を人間が唱えて、そして神に逢う、それがイスラームの「神に逢う」ということではないであろうか。クルアーンの朗誦は、神の被造物であってそのままでは絶対に手の届かない、神を見ることも聞くこともできない人間が、絶対的で超越的な神に逢うことができる唯一の手段なのである。

クルアーンの描く超越的な、絶対的な超越の神、人間界とはまったく関わりのない神、しかしその神の言葉が、私たちに与えられたために、ちょうどイエスが神の子とされたのと同じように、信者は人間の立場にありながら、神に出逢う、神の力に逢う、神の精神に触れることができる、そういう神に逢う手段としてのクルアーン朗誦がある。

ほかならぬ神の言葉であるクルアーンを、神によって創られた人間が声を出して唱えることで、人間は神に逢うことができる、それがイスラームの「神に逢う」ということであり、「神秘体験」なのである。

(本文中の「クルアーン」の引用は『日亜対訳注解聖クルアーン』(日本ムスリム協会)から引用した。一部に著者が独自に訳出した部分も混在していることをお断りする。)

注

(1)『聖書』(聖書協会共同訳、日本聖書協会、2018年)「ヨハネによる福音書」第1章1-5。「初めに言(ことば)があった。言は神とともにあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった」。ヨハネによる福音書は、3つの共観福音書と比較すると、グノーシス主義の影響をうけた独自の思想に貫かれていて、特にイエスは神の子であり、神の言葉が受肉して、人間となったものであることを証明しようとした。

(2)ヘブライ語聖書(旧約聖書)は筆記者の名を明らかにしていないが、双方の聖書には、筆記者が存在することはよく知られている。新約聖書では最初の4福音書には、それぞれに筆記者の名前が「・・・による」として冠されている。さらに新旧双方の聖書には古来、無数の版が存在していて、正典・外典・偽書などに仕分けされている。正典とされなかった版も、それぞれの時代や宗派の思想を表していることが多く、エジプトで発見された「ナグ・ハンマーディー文書」とそれに含まれていた『トマスによる福音書』、そのほかに『ユダによる福音書』、『マリアによる福音書』などがあり、初期のキリスト教研究にとって貴重な文献である。

(3)聖書の「ヨハネによる福音書」が語る複雑なロゴス・キリスト論と比較すると、イスラームでは単純・直截に『クルアーン』のみを神の言葉とする。クルアーンには記者は

存在せず、神が天使の口を介してムハンマドに語り掛けた言葉がそのままに人間の手によって書き留められ、ムハンマドの死後、20年ほどの期間内に結集されたものである。そのためにクルアーンには外典や偽書が入る余地はないと考えられている。

(4) 「彼(神)は真理をもって天と地を創造されたかたである。その日は、彼が『あれ』(kun)と言いたまえば、すなわち有る(fa yakūn)。彼の言葉は真理である。』『クルアーン』(六/七三)、同様の表現が二/一一七、一六/四〇、三六/八二に見られる。

神がただ「有れ」と命令すれば、無限の無から天地や万物が出現する。この「有れ」という命令の言葉による創造はヘブライ語聖書(旧約聖書)の「光あれ」に始まる一連の創造の言葉に共通するものがある。クルアーンの記述はヘブライ語聖書に比べると、創造の対象が具体的に示されていないために極めて単純化された表現となっているが、それゆえに無からの創造の全体像を包括的に象徴しているとも考えられる。

(5) キリスト教では神の言葉であり、神の子でもあるイエスを通して神に祈り近づくことができることとされるが、イスラームでは創唱者のムハンマドは、神の言葉を受け取るという役割を果たしたが、全く普通の人間であるとされ、彼に聖性は与えられていない。しかし、後世には、罪の軽減のためにムハンマドが天国でも罪人のとりなしを行うとの庶民的な解釈が認められるようになり、ここから、イスラームでも民間信仰として聖者崇拜が盛んになった。

(6) クルアーンには先行するユダヤ教、キリスト教と同様の預言者が20名、クルアーン独自のアラブ人の預言者が5名、存在する。聖書と共通する預言者は、アダム(アダム)、ヌーフ(ノア)、イブラーヒーム(アブラハム)、ムーサ(モーゼ)、イスマーイル(イシュマエル)、ヤークーブ(ヤコブ)、ユースフ(ヨセフ)、ダーウード(ダビデ)、スライマーン(ソロモン)、イーサ(イエス)など。クルアーン独自のアラブの預言者は、フード、サーリフ、シュアイブ、アイユーブ(ヨブ)、ムハンマドの5名。この中でモーセ、ダビデ、イエス、ムハンマドが、神から言葉を与えられて使徒と呼ばれる。モーセにはモーセ五書、ダビデには詩篇、イエスには福音書、ムハンマドにはクルアーンが与えられた。

キリスト教では神の子とされるイエスは、イスラームでは預言者で神の使徒とされる。

(7) 聖書について「神の言葉」という表現は明らかに筆記者がいるにもかかわらず、多用されている。新旧の聖書は「まぎれもない神の言葉」とされるが、それは聖書が、信仰心が溢れるままに神の靈感に導かれ筆記されたという理解から、聖書全体を神の啓示の包括的表現であるとしていることによる。そこには神による大いなる約束と救済が記されていることによって、聖書の言葉は単なる人間の言葉ではないという理解がある。

(8) クルアーンの章句がどのようなおりにムハンマドに届けられたのかについては、いくつかの伝承があるが、イスラームの宣教活動のなかでムハンマドを取り巻く状況は極度の困難や多くの犠牲を伴うものであった。神は、それぞれの状況変化に対処するため、あるいは警告や訓辞を与えるため、困難な事態にあつては預言者や信徒を激励するため、随時的なさまざまな事態に即した内容の啓示をムハンマドに与えたと考えられている。した

がって、状況が異なれば、神の言葉や命令も異なってくることもあり、啓示の時期によっては、相互に矛盾する内容がみられることにもなる。

クルアーンの章句の矛盾や曖昧な点は、後に神学上の大きな争点になっていくが、中世の法学者によって、このような場合には、時期的に新しく啓示された言葉によって過去の啓示が「廃棄」あるいは「修正」されたと判断されることが多い。

(9) イスラーム以前のアラビア半島では、当時の世界的な文明には浴していなかったが、言葉を操る巧みな文芸が盛んであり、特に詩が好まれ押韻文の美しさが競われていた。クルアーンもその伝統を踏襲して、詩のリズムや脚韻の手法を多用している。この韻文詩の技術と、生き生きとした会話体が混じりあって、独特の効果を生む。同じ音を続ける詩の脚韻とは異なって、クルアーンの韻は似た音が続くサジュウという形式をとっているが、このような類似音の反復は、聞く者を陶醉の境地に誘う力があるといわれている。イスラーム以前のシャーマン（アラビア語ではカーヒン）は、このサジュウ形式の文体を用いて占いや予言を行っていたといわれる。クルアーンにはムハンマドはカーヒンではないし、啓示はカーヒンの言葉でもないことが繰り返し述べられているが、特に初期の啓示（クルアーンでは最後の方に編集されている）にはカーヒンの語り口に似たリズム感溢れる短い文章が多い。